

下野市立国分寺小学校

1 学校課題

「できた・わかった」と児童が実感できる授業の実践（第2年次）
～学ぶ意欲を高める指導方法の工夫～

2 研究主題設定の理由

昨年度は、①授業のねらいを明確にし児童に示すこと、②課題発見型、問題解決型等の、児童が自発的に学習に取り組む学習問題・学習課題を提示すること、③終末段階で学習のねらいの達成度合を児童が把握できるような振り返りの場面を設定することを中心に研究を進めた。その成果として、単元や単位時間のねらいの明確化、行動レベルのめあての提示等により児童の学ぶ意欲の育成を図る等の成果をあげることができた。また、終末の場面での振り返りを確保した活動を位置付けることが習慣化され、振り返った結果をより有効に活用し、共有化を図っている。

今年度は、これまでの成果や課題をもとに、特に学習意欲に視点を当て、学習意欲をどのように持続させていくかを課題とした。「できた・わかった」ことを「児童が実感」できるような授業づくりを、児童の学習意欲の向上の視点から実践していくことで、児童がより主体的に学び、学力を向上させることにつながると考え、本研究主題を設定した。

3 研究主題の捉え方として

(1) 「できた・わかった」を「児童が実感できる」こと

この学習で児童がどのようなことを捉え、終末の場面で児童がどのような姿を示すかを、授業者が明確にすることで、児童が「できた・わかった」姿を見取ることができる。その際に、ねらいを明確にした分かる授業づくり、実現状況の把握と指導の工夫・改善、評価の改善・充実の一連の過程は必要不可欠である。児童の学ぶ力をさらに高めるために、「ねらいの明確化」と「振り返りの充実」は、「分かる授業づくり」のための当たり前の取組と捉え、学力調査の結果等を基に、本校の課題を明らかにした授業改善を図る取組について検討していく。

(2) 「学ぶ意欲を高める」こと

児童が「できた・わかった」と実感できるように必要な要素は、「主体的に学ぶ態度や意欲」であると考え。児童が学ぶ意欲を高め主体的に学ぶことは、学力の定着の根底を支えるものである。意欲をもって学習に取り組めなければ、「できた・わかった」と実感することはできない。そのため、以下の手立てを研究しながら、児童の学ぶ意欲を高め、「できた・わかった」という実感をもてるようにする。

- ① 児童の興味・関心を高める導入の工夫
- ② 学ぶ必然性があり、ねらいを明確にした学習課題の設定と提示
- ③ 学ぶ意欲を高める教材の工夫
- ④ 学ぶ意欲を高め、主体的に取り組める教師の発問、言葉かけの工夫
- ⑤ 学ぶ意欲を持続し、解決までの見通しを明確にした学習活動の工夫
- ⑥ 学び合いのよさを実感できる学習活動の工夫
- ⑦ 学ぶことの楽しさや達成感が味わえる振り返りの充実やそれを指導に生かす工夫

4 研究内容

(1) 実施した授業研究会

- ① 4年 算数 およその数
- ② 6年 国語 自分の感じたことを発表しよう
- ③ 2年 国語 登場人物の気持ちを音読で表現しよう
- ④ 1年 国語 本をえらんでよもう
- ⑤ 3年 道徳 相手を思いやり親切に
- ⑥ 5年 算数 割合



5 本年度の成果と課題

(1) 成果として（※ 特に「学ぶ意欲を高める指導方法の工夫」から）

- ① 教師の意図的な問いかけ、体験活動の実施、児童の興味・関心を高める働きかけ等、授業の導入場面での工夫が示され、児童の意識付けや学習意欲の向上を促す効果がみられた。（上記3－（2）－①、②）
- ② 学年の発達段階や児童の実態に応じて、児童がより意欲を高めるような学習活動が仕組みられ、児童の主体的な学習が進められていた。それぞれの教科等の特性に合わせた、意欲付けが検討された。（上記3－（2）－③）
- ③ 学習問題や学習課題を、「なぜ」、「どうして」のような理由付けを問う内容とすることや、アクティブラーニングの手法を用いることを通して、児童の思考をより活性化させることができた。（上記3－（2）－④、⑤）
- ④ ペア学習やグループ学習等を、学習活動の中に柔軟に取り入れることで、共同で学習に取り組むことの楽しさを実感する効果が生まれた。また、その結果、児童一人一人が自分の考えを共有し合うことで、学習意欲をより高めることができた。（上記3－（2）－⑥）
- ⑤ 学習内容や学習形態によって、効果的な振り返りの方法が検討された。終末段階で改めて振り返りの時間をもつだけでなく、学習の流れの中で自然に振り返りが進められる方法が工夫され、学習の終末段階でも意欲が継続される様子がみられた。（上記3－（2）－⑦）

(2) 課題として

- ① 単元等のねらいをより明確にし、そのねらいを達成するために、必然性のある学習活動を積み重ねていく。この単元で、この単位時間でどのようなことを学習していくかを、教師自身がより明確にしていく。
- ② 児童の思考を活性化させるために、アクティブラーニング等の手法を積極的に取り入れていく。その際、児童一人一人が、自身の考えを明確にもち、自分の考えをはっきり説明できるような指導方法を検討する。
- ③ 学習意欲の捉え方が様々であり、それぞれの学年の捉え方で進められる部分が多く、焦点化が不十分であった。学校課題研究のPDCAサイクルを構築し、目的を明確にした研修を実施していく。